

崩壊するアマチュアリズム

日 高 哲 朗 (千葉大学教養部)

1. はじめに

アマチュアリズムはイギリスに生まれ、オリンピックのなかで育まれてきたと言ってよい。オリンピックはアマチュア・スポーツマンの祭典であり、参加はアマチュア・スポーツマンに限られる。オリンピックに於いてアマチュアリズムの遵守が厳格に守り通されてきたのは、オリンピックというものが、アマチュア・スポーツの最高の祭典であり、アマチュア・スポーツマンが最終的に目標とする大会であってアマチュア・スポーツのピラミッドの頂点に位置しているからであると言えよう。オリンピックの参加資格としての「アマチュア規定」はオリンピックが回を重ね年月を経るにつれて種々の修正が加えられ、また一方新しい条項も盛り込まれるようになってきた。しかし、現代ではそのアマチュアリズムの理念に対して、むしろ否定的な見解が出され、崩壊するアマチュアリズム、衰退するアマチュアリズムが声高に叫ばれ、その空洞化に対し鋭い批判も行なわれ出している。確かにアマチュアに對置されるプロとの相違も曖昧なものとなっており、特にかたくなに拒否してきた損失賃金補償 (broken time payment) についてその規制が緩められたことから、現実的に金銭の授受が認められ、その結果、プロとの境界はますます不鮮明極まりないものとなってしまった。また I.O.C の定める「アマチュアの定義」が「参加資格」に改められたことで⁽¹⁾ オリンピックに於けるアマチュアリズムもその基盤を弱めることになってしまった。それにまた川本信正が指摘するように、⁽²⁾ 日本体育協会は「アマチュア・スポーツのあり方」を規定しているものの、体協の定める「アマチュア資格」は加盟団体に登録した者に適用され、実質的に未加盟の多くの人はプロでもアマでもないわけで、「アマチュアとは何か」の理念は一般の大多数のスポーツ愛好者には無縁のものになっている。そのようなことはさておいてもこれまで育まれてきたアマチュアリズムの精神も現状にはそぐわない部分を露わにし、至る所にその矛盾を見せ始めている。オリンピックとともに歩んできたアマチュアリズムも旧態依然としたものでは現代スポーツに合致しないことが明白になってきているのだが、しかし、角度をかえてみればそのことはアマチュアリズムの変遷が歴史の流れに乗って徐々にその姿を露呈してきたスポーツの諸問題点を一あるいは現代スポーツの特徴と言い換えても良いのかもしれないが、それらを映し出す鏡として把えることができることを示している。これまで培われてきたアマチュアリズムの精神に立てば現代スポーツは多くの歪みを持つものと映るのかもしれないが、それだからこそアマチュアリズムこそそうした問題点を映し出す鏡なのであり、アマチュアリズムの変遷は近代スポーツの特質を知る上で重要な手掛りを与えてくれるはずである。

2. アマチュアリズムの変遷

アマチュアの語源は古代ギリシヤに遡り、道楽者、愛好者を意味する *amator* であると言われている。それが仏語の *amateur* (美術品の鑑定家)、英語の *amateur* (優れた絵画と音楽を鑑賞する者) となり、スポーツ関係に使われ出したのは 1800 年代後半イギリスに於いてのことのようである。⁽³⁾

そして、最初に成文化されたアマチュア規定は、ヘンレー・レガッタの参加資格のなかにおい

てであるというのが一般的な通説となっている。それは1878年のことであり、「アマチュア選手あるいはスカラーは陸海軍士官、文官、高等の職業に従事するものであって、大学もしくは高等学校の学生、生徒、その他労働者、または職業競技者を含まない既設の漕艇クラブ員に限る。賭金、金銭、入場料を以てに競技に参加した者、生計の手段として種類のいかんを問わず競技に従事し、あるいは指導し、援助した者、および職業的労働者を除く⁽⁴⁾」というものであった。「職業的労働者」とは、「造艇の仕事に関係したり、肉体労働者、機械工、職人、労働者」のことであった。そこでは金銭的利益の問題はさほど重要ではなく、むしろ参加資格としての社会的地位、特にその職業が問題とされたのである。ジェントルマン階級の子弟の教育機関であるパブリック・スクールにアスレティズム(athleticism)が浸透しスポーツが盛んに行われるようになるのが19世紀中葉のことだが、その出身者がスポーツの担い手の中心的役割をはたしスポーツの担い手をジェントルマン階級に限定しスポーツを独占しようとする意図をもってアマチュア規定が作成されたと推測できよう。しかし、社会的身分及び職業という面でのアマチュア規定はすぐに削除され、その後は報酬や手当の面から規定されるようになった。ただアマチュアという言葉とジェントルマンという言葉が相互に置き換え可能な言葉であり、「アマチュアとは、ジェントルマンを意味していた⁽⁵⁾」という事実を銘記しておかねばなるまい。彼らがアマチュアをジェントルマン階級に限定したのは、そのことが上流階級をスポーツに取り込む為に必要だったからであり、彼らがスポーツに興味を持つことによってスポーツはより発展するという期待があったからだと言われている⁽⁷⁾。また、競技場に於ける習慣や礼儀がより重要であると考えられ、スポーツに労働者階級を取り込むことは競技場におけるその紳士的精神の維持を困難なものにしてしまうという危惧があったからだとも言われている⁽⁸⁾。現実にはそのような危惧は当然なかったわけだが、彼らが維持しようとした精神こそアマチュアリズムを支えるフェア・プレーとスポーツマンシップに通じる精神、すなわち「悪意なき技術、怒りなき闘い⁽⁹⁾」を讃美するものであった。現行のスポーツ・ルールのなかにも「Ungentlemanly Conduct」(紳士的行為)という言葉が使われ、これらは厳しく禁止され、ルール・ブックに明記されなくとも「紳士的に振る舞う」ことは暗黙の了解事項となっているのである。

アマチュアリズムの理念とは一言で述べると「金銭上あるいは如何なるものであれ物質的利得を目的としないスポーツを行う」というものであり、「スポーツを愛するが故にただそれだけを目的としてスポーツを行う」というものであって、これは時代を経た今でも一貫して流れ続けているアマチュアリズムの理念である。そこには物質的な報酬を求めて行なわれる競技ではないからこそ、その純粋性を保持でき、その「無償の精神」こそがスポーツの墮落を防ぐ大きな防波堤となっているのだという主張が込められている。その背景には物質的利得が目的とされる競技は見世物となり、競技者の精神を墮落させてしまうという考えが流れている。そこに於いては競技は目的ではなく手段であり、競技を離れた所に目的があり、プレーヤーは自分自身競技に没頭し楽しむということではなく、観衆を喜ばせる為にプレイしてしまうものだという批判が込められている。簡単に言えば、アマチュアリズムの理念の根底には隠された動機をもってスポーツを行うことを拒否し、ただ単にスポーツが好きだからという動機からスポーツを行うことを称賛する思想が流れているのである。

さて、そうした思想を背景に物質的利得に対する現実的規定や、さらにその後は諸般の事情に対応する形で規定条項が複雑となり、遠征期間、合宿期間の規定、損失賃金補償、試合に要する経費(旅費・宿泊費)についての規定、そしてドーピング、さらにセックス・チェックなどについても明確な規定が行なわれるようになり、明文化されてきている。

アマチュア規定が広汎にわたりかつ複雑詳細になってきたのは、アマチュア・スポーツ人口の増大とそれに付随して生じるアマチュア規定に対する解釈の相違を防ぐ為であったと言えよう。アマチュア規定を普遍的な形で多くの人々に公平に遵守させる為にとった一つの処置であった。これはルールに則って正々堂々と平等な条件のもとで闘うこともアマチュアリズムの理念であることを示す一つの事実である。

しかし、そのことはまた別の角度から見れば、現代スポーツの一面を浮き彫りにしたものとも言えない。アマチュア規定の条項の不備をついた行為、あるいは条項の裏側を巧妙につく違反行為が行なわれてきた結果とられた条項の改正であり、あるいはその追加であったはずである。練習時間や試合あるいは外国遠征に関する規定、ドーピングに関する規定、またセックス・チェックなどは、勝利の為には手段を選ばないスポーツ選手の存在を明白に示すものである。プロフェッショナルという言葉は、例えば、「職業的な軍人、音楽家あるいは講演者など」「特に一般的には余暇に行なわれるような仕事を専門として又はビジネスとして行なう人に適用される⁽¹⁰⁾」が、まさにそのようなプロと錯覚されるほどのアマチュア・スポーツマンが出現し始めているのである。

アマチュアリズムの歴史の変遷を総括すると、アマチュアリズムの主要な目的は、社会階級間に区別を設けること、競技に際して何らかの有利さを持っているものはアマチュアの資格を持たないことを言明すること、隠された動機を持ってスポーツを行う者を排除するという⁽¹¹⁾ことであつたと言えよう。

アマチュアリズムを育ててきたオリンピックはソ連の介入により急速に変化したと言われ、東欧諸国のステート・アマと呼ばれる選手の出現で、オリンピックに於いて西側選手が追い越されるようになってからはメダル争いが激化し、シヤマチュア(にせのアマチュア)すなわち前述のステート・アマ、および資本主義諸国に於いて見られる企業に依存する企業お抱えのコマーシャル・アマチュアも現われるようになった。オリンピックに限らないが、スポーツの場は企業の進出する格好的となつたし、又、政治の舞台ともなり、スポーツを愛するが故にただそれだけを目的として行なうというアマチュア・スポーツの理念は揺さぶられてきている。

このような状況に陥った直接的な要因はメダル争いの激化であり、それと不可欠の関係にあるスポーツの高度化であると言えないだろうか。アマチュア規定の条項の改正、追加もまさにこの点から納得できる説明を得られるのではないと思われる。

そこで、崩壊するアマチュアリズム、衰退するアマチュアリズムと形容される現代のアマチュアリズムをメダル争いの激化にともなって展開してきたスポーツの高度化を焦点にして掘え直してみようと思う。

3. スポーツの高度化

スポーツの高度化とは、一言で述べれば、スポーツにおける記録の向上、競技力の向上であり、それに関わる諸側面の発展のことである。記録の向上には体力、技術の向上、並びに戦術の理解、開発が不可欠だが、それはトレーニング方法の改善、用具の改良、開発を伴うし、あるいはまたさらに広くスポーツ・ルール、スポーツ組織の発展などスポーツに関する全般的な側面の発展も促す。これらを総称してスポーツの高度化と呼んでいる⁽¹²⁾。このスポーツの高度化をもたらし要因には、スポーツそれ自体が内包している要因と、それと並んでその高度化を許容しむしろ積極的に支援する現代社会の持つ理念というもの⁽¹³⁾が深く関わっていると思われる。

スポーツそれ自体が内包している要因…スポーツは多くの人々が定義しようとした現象であるが、ホイジンガ⁽¹³⁾によって提出された「遊び」の概念がスポーツに適用されることについては意見の一致を見ている

ようである。そのなかでロイはプレイ・ゲーム・スポーツ・アスレティックスというパラダイムを描き、競争の要素が強く働くプレイはゲームであり、そのなかで特に身体的能力 (physical prowess) を必要とするゲームをスポーツと捉えている。このロイの言説を借りて言えば、「スポーツとは身体的能力を必要とする競争的遊戯である」ということになる。スポーツのなかに競争的要素を見、それが特に身体的技能を必要とするものであるとする彼の見解は多くの人の賛同を得ることができよう。

その競争という要素が強く働き出すと、つまり競技において勝利を得るということが兎にも角にも第一の目的として追求され出すと競争の激化を招来し、「勝利」の実現の為に多くの手段が講じられるようになる。トレーニング方法の改善、用具の改良など選手の競技力を増す為の様々の方策が講じられるわけである。この競争という要素こそスポーツの高度化を生み出した第一の要因と考えられる。

競争において勝利を得るということが重要な意味をもつのは勝利が自分の優秀性を他人に示す有効な根拠となるからであり、勝利が自分の能力を高めてゆく不断的努力の証明と映るからである。個人の内にひそむ自分の優秀性を証明したいとする欲求の充足が、人為的に作成されたルールによって統御された闘いの場で行なわれる限り、現実世界にその闘いが敷衍することはない。スポーツは現実世界とルールによって区別されたプレイ・コミュニティのなかで行なわれ、そのなかでルールによって闘争とは区別される競争が行なわれる。そこで争われる勝敗は「遊び」の領域における優劣であるが、「遊び」の領域のなかでは相対した2者の現実社会における地位関係は剥き取られ、現実社会における優劣が「遊び」の世界における優劣に直接関与することはない。こうしてスポーツの場における勝敗は、社会的地位関係などの社会的拘束から解放された人間によって、その個人の持つ力のみを頼りに争われる結果、自分の優秀性を示したいと願う者にとって、スポーツの場における競争は大きな魅力である。またスポーツという「遊び」の領域における優劣が現実世界における優劣に直接置き換えられることはないことから、スポーツの場における競争は許容されることはあっても禁止されることはない。

しかし、矛盾するようだが、スポーツの場における優劣が社会的に大きな関心を引き起こす結果、競争の激化を招来し、スポーツの高度化を促進している一面も決して看過することはできない。むしろこの要因の方が「高度化」というものに大きな影響を及ぼしていると言っても過言ではあるまい。すなわちその要因とは、簡単に言えば、「勝利」に対して他人の称賛があり、同時に社会的名声と社会的地位を獲得できるということに由来している。「勝利」は誰の手にも簡単に手に入るという性格のものではない。最終的には唯一人の人間、唯一つのチームにしかもたらされ得ないものである。それ故、多くの人々が参加する競技会において「勝利」を収めることは非常に稀なことであり、そのことが「勝利」に対して稀少性という稀少価値を与え、その結果、稀少価値を帯びた「勝利」は社会的にも評価され大きく取り上げられることになる。そして代表制が敷かれる競技会においてはそのことはさらに増長されてくる。それは稀少性という観点からだけではない。代表制を敷くとその代表選手は一個人の名前で競技に参加するのではなく、集団 (国家) の名を背負って参加することになりかねない。例えばマラソンを考えてみよう。瀬古というマラソンランナーは、国内競技会においては彼の所属する企業名を胸にして走り、国際競技会においては日本を代表して参加する選手であり、日の丸を胸にして走る。瀬古というマラソン・ランナーが個人の力で勝ちとった優勝という栄冠は、彼の所属する企業あるいは「日本」という「国」の名声をも高め、「勝利」というものが選手個人はもちろんだが選手の所属する集団にも帰せられるわけである。国際競技会における国旗の掲揚はその象徴である。その意味で国際大会は実際に競技を行うのは一個人ではあっても、代表選手を送り出す国同士の威信をかけた競争の場となり、代理戦争的色彩を帯び、勝敗が社

会的に大きな意味を持つようになるわけである。西ドイツで行なわれたミュンヘン・オリンピックにおいて何故あれほど突然に東ドイツの選手が活躍したのかの問いかけにはこの観点から答を出すことができるのではないだろうか。

メダルを獲得することは、「スポーツを愛するが故にただ単にそれを目的とし行なわれた結果であったはずのものが、結果においてメダルに選手自身の意志を超えた社会的榮譽のレッテルがはられ、加えて彼の所属する集団にとっても大きな社会的メリットがあるため、すなわちメダルがスポーツ以外の場でも有効に機能するシンボルとなったため、スポーツにおける競争というものが激化してきたのである。こうして彼の競技成績によって彼の関係する集団に対しても社会的榮譽が与えられるとその当該集団は彼の競技力に関心を寄せる。集団として彼に大きな支援を行い、例えば強化費などの援助を行い、彼がスポーツに専心打ち込める環境を整備するようになるにしたがって彼の競技力はますます高まりスポーツの高度化に貢献することになる。

これらのことは先に述べたロイの提案するプレイヤーゲームスポーツ—アスレティックスという概念図式⁽¹⁵⁾によってより良く説明されるかもしれない。彼はスポーツがより競争的になり、最終的に勝利への志向が強くなるとよりシリアスなスポーツ形態をとるようになることによって、スポーツとは区別されるアスレティックスへ移行すると述べている。プレイ・ゲーム・スポーツが「遊び」の領域に属する「表現活動」であるのに対して、アスレティックスは「手段的活動」であって「労働」の領域に属すると述べ、その特徴として複雑な組織、高い身体的能力の要請を挙げている。そして、現代スポーツは「遊び」の領域と「労働」の領域の連続体のなかにおいて、むしろ「労働」の領域に含まれるアスレティックスへ移行していると主張するのである。また、グレイダーはスポーツとアスレティックスを比較して次のように定義している。スポーツとは人間がただ単にその活動から派生され得る喜びとか身体的、精神的、社会的恩恵のみを求めて行う活動であると特徴づけられるのに対して、一方、アスレティックスとは人間が勝利への強い欲求を持ち、本気で目的追求を行う活動として特徴づけられると述べている⁽¹⁶⁾。これらを踏まえて現代において特にオリンピック級のレベルに於いて競技されているスポーツを考えると、そこで競技されているスポーツは、もはや「スポーツ」と呼ばれるものではなく、むしろ「アスレティックス」と呼んで良いものであって、そのなかには、当然アマチュアリズムも変化せざるを得ない状態に陥っていると結論づけられよう。

現代の神話⁽¹⁷⁾ 現代社会を背後から支配している神話を明確にすることは容易なことではないけれどもテクノロジーの発展に象徴的に見られるように、それは進歩・発展・豊富化の思想ではないかと思いたくなる。成長至上主義とでも言えそうな基本的には物質重視の進化論的思想であり、全てにわたって進歩・発展を求め、後退・停滞を認めない成長だけを標榜する神話が支配しているように思える。その思想がスポーツの世界にも浸透し、スポーツの世界を支配しているのではなかろうか。オリンピックのスローガンは「より速く、より高く、より強く」であるし、記録への挑戦、新しい技術の開発は多くの人の注目を集め、高く評価されてきた。陸上競技、水泳、ウエイト・リフティングにおける記録の更新、体操競技におけるウルトラCの開発。そうした記録の更新、技術の向上に対して我々は驚きの目を向けると同時に、それらに高い評価を与え、さらに前進することを求めている。我々は技術文明の発展を支える思想を何の疑いもなく何らの危惧も抱くことなく受け入れ、スポーツの世界にも持ち込んでいるように思える。

4. スポーツの高度化とアマチュアリズム

競技者の競技力の向上はスポーツの高度化に大きな貢献をするが、高度化したスポーツは逆に競技者に

とって到達しなければならない高い規準を提供することになる。これは現実的には記録の測定方法を普遍化し、世界記録、あるいは国内記録、大会記録など様々のレベルの様々の種類の記録を公認し公表することによって行なわれているが、一方ではそれは到達すべき目安ともなるが、他方ではそれは乗り越えなければならない障壁として競技者に押しつけられているとも言えよう。はたして、その競技水準は通り一遍のトレーニングでは到達できないほどの高い水準であり、より多くの時間とエネルギーの消費が要求され、選手個人の素質と努力はもとより、彼を取り巻く環境の整備も競技力向上には不可欠であり、むしろその点の方がより強調されかねない。

こうして、高度化されたスポーツに於いてはトレーニングに多くの時間が費されなければならないし、施設、用具の整備も充分に行なわれなければならないが、それはその競技者只一個人で作り出すことが不可能なほどのものになっている。例えば用具を考えてみよう。現在ではルールのなかで用具の規格統一が行なわれ、各自が勝手に創り出した用具の使用は現実的に難しく、換言すると、ルールで定められた規格品を手製で間に合わせることは実際的に難しく、専門家の手による製品を使用せねばならない。用具の生産が専門家の手に委ねられることで、用具の改良、あるいは新しい用具の開発が行なわれ、スポーツの高度化に貢献することにはなるが、材質、機能の向上はその用具をますます高価なものにしてしまい、一個人の手には負えないほどのものもある。それ故、競技者が所属する集団（学校・企業・国等々）に支援を求めるのも仕方ない一面もある。高度化したスポーツの水準に追いつく為には個人の力を超えた大きな援助がどうしても必要となるからである。また一方、選手が競技会に於いて好成績を収めることは彼が関係する集団の名誉をも高めることになるので、例えば企業などは高い競技力を持つ選手を育成したり、あるいはそのような優秀な選手の獲得に努め、トレーニング環境の整備を行ない、競技者に十分なトレーニングを積むことを保証するようになるわけである。これが企業お抱えのコマーシャル・アマチュアであるし、国家のバック・アップを受けたステート・アマチュアと呼ばれる選手達である。

ここにおいて競技者と彼を取り巻く集団の利害が一致し、競技者は集団に保護されるとともに、また逆に集団は競技者にある期待を持つことになる。そしてその期待が高ざるとそれは競技者にとって過度の要求となり、結果的にスポーツは強制となり大きな負担となりかねない。競技者の自発的な意志というよりはむしろ周りからの強制というものに突き動かされてスポーツを行うという状況も生まれてくるわけである。代表制を敷く限りついて回る周囲の期待は競技者にとって励みでもあるが、と同時に義務へとも転化し易い。そうした心理的負担は、我々がスポーツに対して抱いている理想、すなわちスポーツとは自発的な身体的遊戯であり、その行動のなかで楽しさを得るものだという理想を覆しかねない。プレーヤーが自分自身の欲求充足の為に自発的に行っていたものが他人の期待、集団の期待の為に行なわれなければならないという、その競技者にとりスポーツの疎外現象をも出現することになる。周囲の期待が負担となったその象徴的事件にマラソンの円谷選手の自殺という痛ましい事件が記憶にあらう。

競争の激化とそれがもたらした競技水準の高度化はプレーヤーにより厳しいトレーニング、節制、精進を課し、まさに専門的に専心打込むことを要求し強制する。生活時間の多くをスポーツに割かねば競技に勝てないという実情を我々は正面から見つめなければなるまい。彼らは労働時間の軽減のみならず、トレーニングに必要な用具の提供、あるいは専属のコーチの配置、ましては日常生活の便宜まで配慮されスポーツの競技力向上に日夜明け暮れるわけである。彼らははたして「スポーツによって物質的利得を受けてはならない」とするアマチュア規定に抵触しないと云える選手達なのだろうかと思いたくなる。それだけの時間、エネルギーをトレーニングに打込んで実生活の保証もなくスポーツに没頭できるものかと思慮

にさえ思えるのである。スポーツは「遊び」の領域に属するとされるが、この場合それは「労働」という生活保証があってはじめて「遊び」も存在することを意味する。しかるに労働の軽減あるいは免除によって、もしくは学業の無視ということによって、スポーツに没頭する選手をアマチュアリズムの言う「アマチュアとはスポーツを職業としない選手のことであり」という条項を踏襲している選手と見做すことは到底できない。

先にも少し触れたが、スポーツの高度化は用具の開発、改良をもたらすけれども、と同時に値段の高騰を招いた。その高価な用具のつけは競技者に回されるわけで、競技者にとってはスポーツ用具は金銭面で大きな負担となっている。その結果、選手は試供品として無償で提供される用具には大きな魅力を感じるのとは当然と言えるかもしれない。ここにスポーツへのコマーシャルイズムの浸入の糸口が見え、プレーヤーとのアドバイザー契約などのプロ化への道が見え隠れするのである。このことは特に高価な用具が必要とされる競技では一般的であり、ブランデーの批判した「動く広告塔」と言われるスキー競技では、勝敗が製品の売れ行きを左右し、一国の財政にも影響を及ぼすもので企業の選手に対する支援ははなはだ大きいものがある。また各種スポーツ協会の方でも資金面の補充という点から製品の「検定」制度を敷き、各社の製品を認定することにより、認定料として補助金を仰ぎ、協会自体がコマーシャルイズムの浸入を公けに認めているのである。

このような状況下にある選手に、アマチュアリズムの遵守を叫ぶのは現状を認識しない者の発言であるかもしれない。スポーツは一方で大衆化の現象を生み、他方で高度化という現象を生み出している。高度化したスポーツにおいては、一般の大多数のスポーツマンには及びもつかないほどの高度の技術を駆使し、ハイ・レベルの記録を出す競技選手を生み出したが、そこにはロー・レベルのスポーツとは同一次元で把握されない現象も数多く生み出されているのである。アマチュア・スポーツとして仕事の合間の片手間のトレーニングでは及びもつかないほどのレベルに発展しており、トップ・レベルのスポーツは生活全てを傾注しなければならないほどのものであって、真の意味で「スポーツを本業としない」アマチュア・スポーツの理念を遵守しては勝負にならないのである。高度化したスポーツは「手弁当のスポーツ」を超えた所にあり、アマチュアリズムの理念を超えた所に存在していることを理解しなければならないと思う。少くともアマチュア・スポーツの最大の祭典であるオリンピックに出場するようなトップ・レベルの競技選手に対してはもはやアマチュアリズムを押しつけることはできない状態であることを認めないわけにはゆかないのではないかと思う。

ただ最後に次のことをつけ加えておきたい。技術文明の発展を支えた理念は、進歩・発展・豊富化であり、それは人間に多大の幸福をもたらすものとして信じて疑われることはなかった。しかしながらそのネガティブな一面が顕わになるにつれて、例えばシュマッハーの主張する「スモール・イズ・ビューティフル⁽¹⁸⁾」の流れを汲む一派が形成され、進歩・発展の理念に疑問が投げかけられてきている。スポーツにおいてもこの高度化に対する再考が要請されていると思われる。そもそもアマチュアリズム衰退の一因となったのはこのスポーツの高度化であった。記録の向上・技術の向上を目指すあまり、過重のトレーニングを強いられ、拳句にドーピングの使用へ至るなど人間不在のスポーツがまかり通り出したのである。

今ここで必要とされることは端的に言ってアマチュア条項をどのように改正するかということではなく、アマチュアリズムの崩壊という現象によって顕在化してきた現代スポーツの弊害にどのように対処するかということである。そしてそのことを問題とする場合、我々人間の能力には生物学的に或いは生理学的に限界があり、その意味で人間がやる以上スポーツに於いても、記録、技術には限界があるということを確認

めることではないかと思う。技術文明を裏側から支えている思想を無批判的にスポーツの世界に持ち込むことは、スポーツが持っているより根源的なものをなおざりにしてしまうのではないかと懸念されるのである。この問題に対しては今後さらに深い哲学的な問いかけが必要とされよう。

(注)

- 1) 1972年に改正された。
- 2) 川本信正 「スポーツの現代史」 大修館書店 1976年
- 3) 鈴木良徳 「アマチュアリズム200年」 日本体育社 1974年 P36~37
- 4) 丹下保夫 「体育技術と運動文化」 明治図書 1963年 P51
- 5) 詳しくは、P.C.マッキントッシュ著 「スポーツと社会」 不味堂書店 1970年 P71~96 参照
- 6) 鈴木良徳 前掲書 P45
- 7) Glader, E.A. "Amateurism and Athletics" Leisure Press N.Y.1978 P16
- 8) P.C.マッキントッシュ 前掲書 P199
- 9) Harrow School の歌の一節 "Art without malice and strife without anger" のことである。(McIntosh, P.C. "Fair Play" Heinemann London P31)
- 10) P.C.マッキントッシュ 前掲書 P194
- 11) Glader, E.A. 前掲書 P189
- 12) 今村嘉雄 宮畑虎彦編集 「新修体育大辞典」 不味堂 1976年 P783~784
- 13) ヨハン・ホイジンガ 「ホモ・ルーデンス」 中央公論社 1963年
- 14) Loy, J.W. "Sport and Social System" Addison Wesley 1978 P21
- 15) 同上 P21
- 16) Glader, E.A. 前掲書 P189~190
- 17) サティシュ・クマール編 「風船社会の経済学」 ダイアモンド社 1981年 P65~94
- 18) E.F.シューマッハー 「人間復興の経済」 祐学社 1976年